泉穂のいまどき恋愛講座

"歳を重ねる"ということは、本当に色々な事が見えてくるものだ、と最近つくづく思うようになった。とは言っても、私もまだ29歳で、エラそうなことが言えるほど成熟している訳ではないけれど、それでも、まだ20代の前半にいる人たちを観察していると、早くもちょっとオバさん臭く、「まったく、君たち、それは違うんじゃないの?」思わず言いたくなってしまうことがあるのだ。

たとえば、ブランド志向。一時期ほどではなくなったにしても、やっぱり強烈なシャネル・フリークの女のコや、イタリアンブランド大好きの男のコたちを見ると、とても恥ずかしい気持ちになってしまう。

だいいち、シャネルの洋服というのは、基本的にお金持ちのマダムのための洋服であって、スーツなんてとても若い女のコたちが着こなせるようなものではなく、カジュアルなラインにしたって、20代前半の女のコたちが身に付けていると、パッチモンに見えてしまうのがオチだと思うのだけれど、彼女たちは「あたし、シャネルを着てるんですからねっ」という空気を撒き散らしながら、ツンと澄まして歩いていたりしていて、そんな光景を見ると、トホホホって感じで情けなくなってしまう。

よくブルジョワ系のファッション雑誌なんかに、芦屋あたりのお金持ちの母娘が登場してきて、「私たち、親子でシャネルのファンなんですぅ」なんてのたまっている記事を見ると、寒気が走るのは私だけでしょうか。

本当のブルジョワというのは、とても洗練されているもので、間違っても20代前半の女のコにシャネルのスーツや外国車を買い与えるような教育はしないものだと思い込んでいた私は、あの手の記事を初めて見た時、ああ、なるほど、お金があるということと、上品でエレガントだということは、まったく違う意味なんだなぁと悟ったものだった。

などと言う私も、今から2年前、ダンナ様と一緒にパリ旅行をした時、とても恥ずかしいコトをやってのけてしまった。その旅行は、私が2冊目の本を出した時にいただいた(それほど多くはない)印税を全部使い果たした旅で、感じの良い清潔なブチホテルに泊まり、メトロで移動し、街を歩き廻り、美術館やオペラを鑑賞し、食事は街のビストロやブラッスリーで楽しくいただくという、まったく私たちの年齢にふさわしい過ごし方をしていたというのに、クリスマスの夜、「せっかくパリで聖夜を過ごすんだから!」などと張り切って、超一流の伝統あるレストランを予約して出掛けてしまったのだった。

結果はまったく悲惨なものであった。一言で言うと、"場違い"。もちろん、給仕たちはイヤミな態度を取った訳でもないし、私たちもその場の雰囲気を壊さないようにきちんとした洋服を身に付けていたのだけれど、それでも身が縮むような思いがして、せっかくの最高級のお料理を、全然楽しむことができなかった。

結局、たとえお金を持っていたとしても、若い人たちが立ち入ってはならない場所があるのだ、とその時、身を持って感じた。

つまり、私たちに足りなかったものは、お金ではなく、年齢だったのである。

どうやら日本人は、お金があるからと言って、20代前半の"お子様"たちが平気でパリの一流ホテルに泊まり、シャネル・ブティックで買い漁るといった事をしてしまいがちだけれど、これが現地の人たちからヒンシュクを買わない訳がない。

経済大国に住む私たちなのだから、もっと精神的に成熟して、その土地の習慣を侮辱するような行為は慎むだけの常識を持ちたいものだと思う。そして、こういったことは、これから大人になっていく私たちに、必要なことではないかしら?つまり若者たちは海外に行った時だけでなく、日本にいる時から、たとえお金があっても、シャネルやアルマーニなどを身につけないべきなのだ。(ましてやそれらをディスカウントショップで明け方から並んで買うなんてサモシイことは論外)

事実、若い女のコたちに毛皮のコートはとても着こなせない(ホステスにしか見えない)し、女子大生が煙草を吸っていて格好良く見えた例もない。背伸びをしてツンツンすましている若い女のコなんて寒々しいだけ。若い女のコの笑顔ほどチャーミングなものはないのよ。

どうか、"若さ"という特権を、もっと正しく楽しんでください。長い人生、先の楽しみも残しておかなくちゃね。

プロフィール　1965年生まれ。
同志社女子大学卒、(株)電通ブロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスまで、待てない」(大和書房)など。

MARUOKA IZUHO

マンボカーパラダイス

抜け道マップっていったい?

今年のお盆の渋滞は壮絶でしたね。なんかテレビつけてもヘリコプターとかから、現在秦野中井六〇キロです、なんて言われてもそれは大変、でかけなくてよかったよかったなんて思っているくらいで、人ごとながら離れていても結構リアルな映像なんで、意外に楽しめちゃって、ニュース見るたびに「おっ今度は関越か、ひでぇーなぁ一二〇キロ渋滞だって、先頭走ってるクルマ誰だよいったい。殴ってやりたいね。そいつ免許もってんのかまったく、いやんなっちゃうねー。渋滞一二〇キロってわかってるくせに、なんで高速に入っちゃうんだろねー」なんて勝手にソファ買う奴は本当にバカだね。そんな本が大増刷完了、売切店続出なんて、わざわざ御丁寧に広告に書いて売ってたら、やっぱり買う前に思いとどまってくれよなぁ。みんな買ったらどういうことになるかくらいわかるでしょうに。そういう私も本屋に行ってどんなものか見てやろうと思ったら、これがなんと懐かしのビニ本状態。立ち読みできねーでやんの。やってくれるよなぁ。それでも私は当然買いませんでしたが、やっぱり買っちゃうバカいるんだろうなぁ。そういう人って昔、ビニ本や自販機本にお世話になっていないのかしら?口惜しい思いとか、あんまりしてないのかしらねぇ。まぁそんなことはどうでも良くて、やっぱりいったいどんなルートが出てるのか一応興味があるんで、がんばって探しましたよ。タダで見れるところ。近所の図書館。あるんですねぇ、いまどき内容は……予想通りのインチキ抜け道マップ。こんなところ通ってみたところで、何分早く着くの?という内容でした。細い路地裏とかこの地図片手に運転する姿を想像すると、本当に日本はこのままでいいのか!なんてわけのわからないこと思ったりもします。一番迷惑なのはその抜け道ルート沿いの住民。これは怒っているでしょう。いきなり他県ナンバーのクルマとかで、家の前がギッシリになるんですから、たまったもんじゃありません。おまけに、3ナンバー、RV車は通行不可、左折無理とか小さく赤字で書いてあるっていったいどういうことなの。どんな道なんじゃあ一体全体。

全国的に最近ではそうみたいですが、平日の渋滞とは別に、休日になると決まって行楽渋滞三〇キロとかなっちゃうのってどうにかなりませんかね。悪いのは高速道路だけ

PARADISE YAMAMOTO

プロフィール　元東京パノラママンボボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた。初代レガシィツーリングワゴン、アルシオーネSVXなどのデザインを手掛ける。マンボ画家ソリマチアキラといっしょの東京ラテンムードデラックスも現在東京の音楽シーンで人気沸騰中。今のところ京都での公演予定は残念なことにないとのこと。みんなで呼ぼう東京ラテンムードデラックス!

着倒れ京都人に送る。

ササイな情報

ドリス・ヴァン・ノッテンの服に初めて接したのは、もう10年近く前のことだ。

ベルギー政府の援助を受けて、東京と大阪でコレクションを発表した7人のデザイナーの内のひとりであったが、この7人のなかで最も、フェミニンなデザインが印象的だった。

この時、コレクションを日本に持ってきていた7人のデザイナーというのは今、振り返ると驚くべき面々で、アン・ドゥムールメステール、マルタン・マルジェラ、ダーク・ビッケンバーグ、ウォルター、ダーク・ヴァン・サーヌ、マリナ・イーにドリスという王立アントワープ芸術学校が生んだ今のモード界の改革者達。しかしながらその当時、日本は国内のDCブーム真最中でベルギーのデザイナーなど、プレスもバイヤーも見向きもしていなかった。ショーも何度か行なわれたが、客席は空席が目立ち、来日していたデザイナー達もやや拍子抜けの様子。おかげで彼らと話す時間もあったわけだけれど。

今、私がファッションの仕事をしているのはこの時に受けた刺激が大きい。当時、自分と同年令（ドリスは当時25才、ビッケンバーグは24才、アンは23才だった）の連中の作る服は、明らかに時代に対するメッセージがあり、日本のDCブランドとは違った出発点から生まれるクリエーションに驚かされた。とはいっても、彼らのなかには川久保玲、山本耀司からの影響を素直に認めるものもいて、彼らとしては日本のデザイナー達に仕事を良く知っていて、「日本でなら自分達のデザインを認めてくれるアパレルがきっとある」という願いを込めて来日したわけだけれど……。

結局、その彼らの願いは、ドリス・ヴァン・ノッテンの服が、現在日本のTVでアイドル達に人気を得ていることから分かるように、10年近くかかって実現した。

でももっと驚くのは、前にもこのコラムで少し触れたけれど、京都にダーク・ビッケンバーグのオンリーショップがあることで、10年かかろうが、ビジネス面から見るとマスでは売れないと言われ続けた彼の服だけで店を構成するという（あのロンドンのブラウンズでさえ、小さなコーナーで置かれているに過ぎない）、こんな無茶をやったのは京都だけで、これは京都という街が持つ本能的に新しいものを許容していく懐の深さのように思う。

個人的にはパリの下請け工場から次のステップを迎えようとしていたベルギーという国、ヨーロッパの偽造品密輸の中心地であるアントワープから生まれるその不思議なエネルギーに、ロンドンでもパリでもミラノでもない、都市としてのいかがわしさに引かれてベルギーのデザイナー達を追っかけていた。ウォルターの商品なんて、切り替えのところがすぐ破けてしまうブルゾンや、安物のTシャツにやたらマジックテープを使い値段がベラボウに高くなってしまったものなど、日本の経済の理論では絶対に生れてこないデザインに、愛着を感じていたが、売る側からすると殆どが不良品。2～3年で日本の市場からは消えていった。

バブルとともに消えたインポートブームの次に、業界とその周りが言い始めた「リアルクローズ」現象。その発火点はこの10年前に彼らが始めたクリエーションにあるわけで、その流れを無視してリアルクローズなんてフレーズで、この日本でムーブメントを画策すると、DCブーム、イタリアブームの二の舞になる。日本の暑い都市を歩いて、本当にリアルだと思うのは、いまだに継承されるリクルートファッションなんだから……。

に横になりながらクーラー一八度、強風にしてひとりごと声にわざわざ出して言ったりなんかして。

首都圏渋滞抜け道マップ最新版登場一冊三九〇〇円とかいうのも呆れるよ。出す奴は賢い？奴かも知れないけど、の図書館には。図書館はなんでも活字離れの影響で、受験生以外利用者が減ってきているらしく、新刊書などリクエストすればいとも簡単に入ってくるシステムになっているそうです。そんなわけで人様の税金で買われたその本のですかね。狭い日本の狭い道に家族を乗せたクルマが、あちこちで立往生してひしめきあうさまは、よその国から見ればさぞかし滑稽なことなんでしょうね。私たちがニュースでよく北朝鮮のパレード見ておったまげるように。

NODA TATSUYA

プロフィール 1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

OPENING TICKET
オープニングチケット有効期限 9/20 TUE ▶ 10/19 WED このチケット1枚で何人でもOK

京都にHOTなスペースが登場!!
GUY SINGING PUB

★男子スタッフ18名がサービス!
★FUNKYなヒップホップ・ソウルダンスを披露
★お客様のリクエストにお応えします!!

OPENING CAMPAIGN
オープニングキャンペーン
9/20 TUE ▶ 10/19 WED
●上のオープニングチケットを持参下さい!!

唄い放題!!
ショットの場合 テーブルチャージ 無料!!
ハウスボトル使用の場合 飲み放題 ¥2,000

※オープニングキャンペーンは、オープニングチケット持参の、来店が初めての方に限ります。2時間まで、AM12:00までのキャンペーンです。

TEL.075-525-0858
〈営業時間 夜8:00～朝5:00〉
京都市東山区四条通縄手上ガル10m西側万平ビル3F

EASY, SOCIAL AND SAFE
簡単に、安全に、そして確実に…

レディーススタッフ急募!!
(18才～24才迄の女性に限ります)
私たちは会社として登録、運営されています。約束を守ること。貴女が稼げて初めて会社が繁栄するとの信念が、私たちの誇りです。

最低保証日給
昼の部 ¥40,000 (AM10:00～PM5:00)
夜の部 ¥50,000 (PM5:00～AM12:00)

●遠方より通勤、引越が必要な方も安心!! 出勤日、勤務時間帯は、ご相談に応じます。
●時給に換算すると¥10,000円以上になります。
●一日だけの体験入社有!! お給料は、その日に全額支給
■詳しくは、お電話でお問い合わせ下さい。

PPCプランニング人事部
TEL.075-361-5296 受付時間 AM10:00～PM10:00
京都市下京区四条河原町下ル順風町315-2 ※阪急河原町駅、京阪四条駅より徒歩スグ